



モバイル牛温恵であらゆる課題を解決



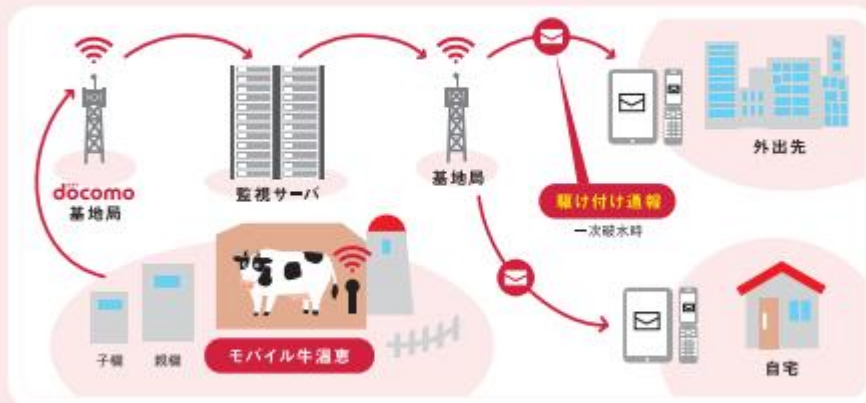
モバイル牛温恵

分娩事故ゼロで
経済的・精神的安定を



「モバイル牛温恵」とは

親牛の発情・分娩を温度センサーで監視する、畜産農家の方のためのシステムです。
「分娩の約24時間前」「一次破水時」「発情の兆候」を検知しメールでお知らせします。



VOICE 農家の方の声

CASE 1



まるで牛が呼んでいるかのように通知が届く
勤めた仲間にも喜ばれています

知り合いから勧められて5年前に導入しました。特に初産牛は気がかりで分娩が近くなると夜中でも数時間置きに見回りを行っていましたが、それでも30頭に2〜3回は分娩事故が起きていました。使い慣れてからの分娩事故はゼロです。まるで牛が呼んでいるかのように携帯電話に通知が届くので見回り回数も減り、安心して飲みに出かけることもできますね。肉体的にも精神的にも負担が大きく軽減して本当に楽になりました。何軒もの農家さんに勧めましたが、悪い評判は一切なく導入して良かったと思っていますよ。

上地 豪一さん

歴55年のベテランで現在牛舎・産子と3人で22頭を飼育。2ヶ月連続で取り巻一仕を獲るなど高品質な牛農家として定評がある。



CASE 2



家事とパート仕事をしながらでも分娩事故ゼロ
女性一人でも畜産農家になれました

子育て中でパート仕事を掛け持ちしながら一人で営んでいますが、見回りをしていない時間に出産し、子牛が胎盤を剥ったまま窒息死していたことがきっかけで2年前に導入しました。分娩の24時間前に届く検取り通知を見てから準備ができるので、別の仕事や家事をしたりと先のスケジュールを組みやすいですね。導入前は分娩が近くなると2〜3時間おきに車で牛舎へ行き見回りをしていましたが、届けつけ通知のおかげで家でゆっくり眠るようになりました。導入後の分娩事故はゼロ。牛は3年間で8頭から18頭に増えました。モバイル牛温恵を導入すれば女性一人でも畜産農家ができることを伝えたいです。

野路 美由希さん

3年前に乳牛。放牧と粗飼料を基本に育てた牛は肥育農家からの評価も高く、早割以上の高値が付く。家畜と牛乳収量割合の女性部長としても精力的に活動中。



生産率が過去最高に
平均以上を記録
未導入農家とは
15ポイント差の開き



パソコンや携帯電話に比べて、モバイル端末での通信が速いため、分娩事故の発生に繋がりにくいと考えられています。

飼養戸数・生産頭数が減少しても生産率は右肩上がり
飼養戸数や生産頭数は年々減少しているものの、同事業を利用してモバイル牛温恵を導入した農家が増え始めた16年度以降の生産率は右肩上がりであり、20年度には累計63の農家が導入し、目に見えて効果が表れ始めた。1同年度、市全体の平均生産率が93.1%と過去最高額も記録しました。その一方でモバイル牛温恵を導入していない農家の生産率が90%と平均を下回っていることからも

そのほか、現場からは数値化できない精神的・肉体的負担から解放されたという声も。「宮古市の農家は牛舎が古く、分産が上手くいかない日にも何度も注視して見回りをしていた。しかしモバイル牛温恵を導入してからは通知を待つだけで済むため、そのような心配が大幅に軽減されたという声が多いです。」



牛舎に設置されたモバイル牛温恵の端末。右に導入されたセンターから体温データが取得し農家に届けられる。

飼養戸数削減を効果
全体的に農家を事業対象に
同事業の対象は飼養頭数9頭以上という制限があったが、市は2年に渡り段階的に対策を講じた。特に小規模農家の生産1頭に対する負担は極めて大きい。全ての農家が事業の対象となったことにより、21年度は11農家、22年度は10農家が事業を利用してモバイル牛温恵を導入し、23年現在は計84農家が利用中である。導入に二の足を踏んでいた農家も前述の成果を農家ごとに聞き、導入に踏み切るケースも多いためである。

目標は月400頭の出荷
長期でも確実に
生産数を伸ばしたい



まずは分娩事故ゼロへ
小さな産後の積み重ねが大事
毎月セリ市場に出荷窓口を設け、農家とセリ場を直結させ、助成金などの案内も丁寧に行うことにより、セリ場と農家の間に「コミュニケーション」を築いていくという宮古市役所畜産課では宮古市のセリ市場で毎月400頭以上出荷できることが理想ですが、21年度の実績は4715頭、22年度は4715頭、23年度は4715頭と、目標を達成するまでにはまだ時間がかかると見込まれています。しかし、導入した農家の生産率が増え、分娩事故がゼロになることで、農家の負担を減らすことと出荷頭数を増やすことが同時に実現できると期待されています。



分娩事故を減らし 生産率を向上

分娩監視装置等導入事業で経営の安定と生産率の向上を推進する宮古市役所。生産率は過去最高の「年1産」を実現。さらなる成果を目指す。



大切に育てられた子牛。温帯気候下で育った子牛の評判が良い。

生産率向上のため
分娩監視装置等導入事業で
モバイル牛温恵を導入
宮古市の肉用牛農家を年齢別で見ると60歳以上が73.45%と全体の3/4ほどで高齢化が進んでいる。加えて導入には初期投資額が大きく、収入のハードルが高いことから、導入のハードルが高いことに加え、2011年に1089戸あった飼養戸数は21年に619戸まで減少。子牛の生産頭数も年々減少傾向にある。そこで市が生産率向上



宮古市役所
宮古市における畜産の主要品種である肉用牛は、サトウキビに次ぐ農業産出額第2位の品目。2021年の肉用牛飼養戸数は619戸で、全体の約27%を占めるが、繁殖用牛の飼養頭数は5,917頭で、全体の約13%であり、他地域に比べて少額(平均9頭)。またほとんどの繁殖農家は2戸のみ。2021年度に引継ぎ「沖縄県畜産共済会」の肉用牛の部において、最優秀の団体賞を受賞し、2連覇を達成した。

のために取り組んだのが「分娩監視装置等導入事業」(以下、事業)。同事業は肉用牛の分娩時死亡事故対策を回り、経営安定と生産率向上を目的に分娩監視装置等導入した農家に対し補助金を交付するというもの。「15～17年度まで実施を続けていた単独事業を活用し、市では9戸の農家が分娩監視装置の「モバイル牛温恵」を導入しました。その後導入した農家から好評だったため、場内事業継続をお願いしましたが、予算化出来なかった。19年度から市単独事業として最大20万円までの補助を設けました。繁殖牛の妊娠期間は約10ヶ月。モバイル牛温恵等の分娩監視装置の導入で分娩事故をゼロに防ぐことができれば安定して年1産サイクルが実現し、生産率が向上すると考えました。

数字と図で見る「モバイル牛温恵」導入後の効果

※2020年度、宮古市役所調べ

